fukui

歴史ある繊維の街 福井

大阪税関 敦賀税関支署 福井出張所長
増井　一友

今年の人事異動で縁があって着任した福井。着任するまでは福井について殆ど知識がありませんでしたが、ファイナンスへの原稿依頼があり福井の歴史や産業を調べる機会を得ました。今回は勤務官署の管内にある福井県嶺北地方を中心にご紹介させていただきます。

1. はじめに

まずは勤務官署である福井出張所の沿革から。

当出張所の管内にある福井県嶺北地方では、戦前から繊維産業が盛んで織物産地としては日本一の生産量を誇り、相当量の輸出が行われていたものの通関官署がなかったため、その通関関係手続等の全ては阪神地方の業者に委ねられていました。このような状況に対し輸出関係者から福井市での通関を要望する声が高まったことに伴い、昭和16年（1941年）9月に福井駅出張所（昭和27年に福井出張所に改称）が開設され、空襲による焼失や福井震災による倒壊、新築、移転等の変遷を経て、平成7年の完成当初から福井市内中心部のフェニックス通りに面した福井春山合同庁舎に入居し現在に至っています。

通常、税関官署は管内の開港（関税法上、貨物の輸出入及び外国貿易船の入出港ができる港）近辺に設置されますが、当出張所では管内の福井港が平成17年4月に開港指定を受けたことから、内陸通関官署（インランド・デポ）でありながら開港を有する全国的にも珍しい官署となっています。

なお、現在の管内における主要産業は、繊維（合繊織物が中心）、機械、眼鏡のほか、近年存在感を増しているスマートフォン向けの電子部品・デバイスであり、これら産業の製品等が当出張所において通関する主要貨物を構成しております。

2. 福井の歴史（嶺北地方）

5～6世紀頃、現在の北陸地方から東北地方の新潟県の中央までの一帯は『越の国』と呼ばれ、嶺北地方は、越の国の中でも朝廷に近いという地勢的な条件に加え、九頭竜川、足羽川、日野川の河川活動により発達した肥沃な土地（福井平野）を有していたことから北陸道の要衝として栄え、その繁栄ぶりは、6世紀初頭に継体天皇が大和朝廷の天皇に迎えられたのはこの国の富力が背景にあったためとの見方がある程であったようです。

その後、越の国が7世紀末ごろに越前、越中、越後に三分割され、嶺北地方は越前国の一部となりましたが、さらにその後、現在の石川県北部が能登国（718年）、同南部が加賀国（823年）として越前国から分立したことにより、嶺北地方はほぼ越前国に相当する地域と定まりました。

中世（15世紀）には、現在の福井市の南東にある一乗寺に居を構えた朝倉氏が5代103年にわたって越前国を支配。当時の一乗谷の城下町は小京都と呼ばれるほどの栄華を極め、第4代の朝倉孝景の頃に最盛期を迎えましたが、天正元年（1573年）、織田信長の軍勢により一乗谷は焼失。現在、武家屋敷、寺院、町屋など、町並みがほぼ完全な形で発掘され、特別史跡、特別名勝、重要文化財に指定されています。

現在の福井市の中心部は、室町時代から北庄と呼ばれ、本格的な町づくりは柴田勝家に始まり丹羽長秀、堀秀政らが引き継ぎ、徳川家康の天下平定後は、その次男である松平（結城）秀康が初代北ノ庄藩主として入封。福井という地名は3代藩主忠正のときに北ノ庄から福居に変わり、のちに福井と改められました。

幕末には、名君との誉れ高い松平春嶽（慶永）が藩主となり、その治下から橋本左内、由利公正などの人物が輩出されています。

3. 地場産業（繊維）について

福井といえば特に眼鏡産業が全国的に有名ですが、今回は歴史ある繊維産業について紹介します。

福井における織物生産の起源は古く、2〜3世紀ころに大陸から移り住んできた人々によって絹織物が織られるようになったといわれています。『続日本紀』の中に和銅5年（712年）、元明天皇が越前ほか20カ国に綾錦絹織物の生産を命じていたことが記されていること、また、延喜5年（905年）には、越前、若狭など36カ国から絹帛を朝貢させていた史実から、当時から既に全国有数の絹織物産地として認知されていた模様です。

中世に至り、文明3年（1471年）に一乗谷に入った朝倉氏が絹織物産業を手厚く保護し、代々足利将軍家へ絹織物を献上しており、その後、柴田勝家も養蚕・絹業の一層の振興を図ったため絹織物の産出量は増大しました。また、初代藩主の松平秀康は「玉紬」を「北荘紬」と改称。藩士の内職として奨励し、品種改良・販路拡大に努め、公儀献上品の一つに。また、その高い品質が全国に知られるようになり藩の財政基盤を支えるものとなりました。

明治維新後、旧藩士由利公正が欧米を視察し、多種の絹布見本を持ち帰り、福井県の繊維業者に欧米絹業の発展状況を伝え見習うよう助言したことが福井県の繊維産業近代化の端緒となりました。明治20年には、当時、羽二重織物産地として知られていた桐生（群馬県）の技術者から羽二重製織技術の指導を受け、当時としては最先端のバッタン機により製織。海外の需要急増もあり、大正中期には福井羽二重の輸出高は全国輸出絹織物の6割を占め、わが国最大規模の羽二重産地となりました。

第1次世界大戦後の景気後退により輸出羽二重の生産は下降したため、当時国産化が始まっていた人造絹糸による人絹織物に活路を求める業者が増加。昭和に入り絹織物から人絹織物への転換が飛躍的に進み、その生産高は全国の7割を占めるに至り人絹王国として繊維産業における福井の名は復権しました。

その後、第2次世界大戦による繊維産業の統制強化、福井空襲、敗戦による混乱、福井震災と相次ぐ災難により大きな被害を受けましたが、合成繊維が登場すると人絹織物から合繊織物への転換が進み、昭和30年代はナイロン織物、40年代はポリエステル加工糸織物で高度成長を遂げましたが、韓国・台湾の繊維産業の台頭により、高度成長に終止符をうち、成熟産業に変貌。円高不況やバブル崩壊による景気後退に陥るも、新たな合繊織物の開発等、業界の総力を挙げた取組みが現在も続いています。

4. 名所（観光）

① 足羽山公園

福井市内にある標高117mの足羽山全体が公園となっています。桜やアジサイの名所として知られ、上記で紹介した継体天皇像のほか、ミニ動物園や自然史博物館などもあり市民の憩いの場となっています。

② 一乗谷朝倉氏遺跡

戦国時代に朝倉氏5代が103年間にわたり越前を支配した城下町跡。前述のとおり、当時の町並みがほぼ完全な姿で発掘されています。毎年8月には『越前朝倉万灯夜』『越前戦国まつり』が併催され、夜には15,000個を超えるキャンドルの灯で幻想的な雰囲気が楽しめます。

③　養浩館庭園

福井藩主松平家の別邸。江戸時代には『御泉水屋敷』と呼称。庭と密接に関連するよう建造された池の周囲の書院建築の数々と、広大清澄な園地を主体とした回遊式林泉庭園は江戸中期を代表する名園の一つとして広く知られていました。

昭和20年の福井大空襲により焼失しましたが、昭和57年に国の名勝に指定されたことが契機となり福井市により復元整備が計画され、平成5年に完成、一般公開されています。

④　永平寺

曹洞宗の大本山。曹洞宗開祖の道元禅師が寛元2年（1244年）に坐禅の修行道場として創建。33万平米に及ぶ広大な境内には山門・仏殿・法堂・大庫院・浴室・東司などの修行の中心となる『七堂伽藍』など、大小70余棟の建物が並んでいます。2015年には、フランスの旅行ガイド本『ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン』で2つ星を獲得しています。

⑤　東尋坊

荒々しい岩肌の柱状の断崖が延々と1㎞にわたって続く景観で、国の名勝・天然記念物に指定されています。岸壁の高さが20m以上の断崖に荒波が打ち寄せる姿は迫力あり。観光遊覧船が運航しており、海上から眺めるライオン岩、ろうそく岩など自然の造形が見ごたえありです。

5. グルメ

① 越前がに

冬の味覚の王者。『越前がに』の食べ方といえば、茹でるのがポピュラーですが、刺身や焼がに、しゃぶしゃぶ、鍋など様々。かにそのものが美味しいため、どのような調理方法でも美味しく味わえます。

② 越前おろしそば

おろし大根をどっさり入れた独特のつゆと黒くこしのしっかりした麺が特徴の越前おろしそば。そばの甘味と大根おろしの辛みからなる妙味はえも言われぬ美味しさ。「越前そば」の命名は、昭和22年に昭和天皇が北陸を視察された際におろしそばを食べられ、後に「あの越前そば」と口にされたことに由来していると言われています。

③ へしこ

へしことは魚を糠漬けし魚の腐敗を防ぐ保存食。江戸時代中期にはへしこ作りが始まっていたようです。イワシやフグなどの魚のへしこもありますが、最も多く生産され、親しまれているのがサバのへしこ。糠を軽く落とし火であぶったものがお茶漬けや酒の肴によく合います。新鮮なものは刺身で食べることもできます。

④ ソースカツ丼

福井でカツ丼といえばソースカツ丼です。揚げたカツを熱々のうちにウスターソースベースのタレに漬け、タレをまぶした熱いご飯の上にのせただけのものです。箸で切れるほど柔らかいカツと、その香り、甘味、酸味が醸すまろやかな口当たりは一度食べたら忘れられない味です。

6. おわりに

福井の歴史や名所等についてご紹介してきましたが、福井は、『47都道府県の幸福度ランキング』において日本一だということで、幸福度繋がりなのか、当所が入居する福井春山合同庁舎のすぐ近くには世界唯一の「ブータンミュージアム」があります。ほかにも芦原温泉や「恐竜博物館」など家族で楽しめる施設等もたくさんありますので、福井にぜひ一度お越しいただければと思います。

ちなみに小職はトレッキングを趣味としておりますので、越前五山（越知山、白山、文殊山、蔵王山、日野山）をはじめとする山々にチャレンジするつもりです。

【参考文献】
・「大阪税関百二十五年史」（大阪税関）
・「大阪税関風土記」（大阪税関）
・福井市役所、福井県観光連盟、福井県繊維協会　各HP

shimonoseki

～自然と歴史を感じる交流都市～下関へ「おいでませ！！」

門司税関 下関税関支署収納課 課長
山﨑　晃司

はじめに

下関税関支署は、明治８年に下ノ関税関監吏出張所として設置され、門司税関下関出張所等への改編を経て、昭和30年に現在の呼称となりました。管内には、萩・宇部の両出張所を有し、管轄地は、下関市、萩市、長門市、阿武郡、宇部市、山口市、美祢市及び山陽小野田市の７市１郡におよび、通算140年以上の長きにわたり、下関地域の発展と共に歩んで来ました。

本州の最西端であり、関門海峡に面した下関は、古代から九州への航路があり、江戸時代に入ると、毛利氏の統治下で培われた北前船による諸国物産の集散地として栄えるようになりました。明治時代に入ると関門・関釜両連絡船の基地が置かれるとともに、大陸方面や台湾などとの貿易港になりました。終戦を迎えるまでは港を含む関門海峡一帯が下関要塞地帯に設定され、写真撮影や地図作製などが厳しく制限されていました。終戦後の昭和45年に我が国最初の国際定期フェリーとなる関釜フェリーが就航し、現在では毎日運航しており、人とモノの往来が日韓親善を側面から支え、韓国・釜山市とは姉妹友好都市でもあります。

歴史的には、最後の源平合戦や幕末における攘夷志士の登場など、日本史における重要な節目に幾度となく登場し、名所、旧跡がたくさん残っています。また、古くから捕鯨が盛んであり、フグの水揚げ高が全国の約８割を占める等、海の幸を堪能できる土地柄でもあります。

関釜フェリー

管内の経済・港湾事情

下関市は、大陸に近いことから古くより海上交通の要衝として、水産加工業及び造船業を中心に発展してきました。

近年では、下関漁港への水揚量の減少に伴い「水産都市」のイメージは薄れてきているものの、本港・漁港地区に食品の、彦島・長府地区に金属、造船、タイヤ等の企業が立地しており、東アジアに近いという地理的優位性を活かし、新港地区（長州出島）、長府地区の整備が進められており、商業、貿易の面を含め、依然として山口県における重要な地位を占めています。

平成21年には多目的国際ターミナル施設として沖合人工島「長州出島」が整備され、東アジアのゲートウェイの役割を果たしています。

北九州市とは関門海峡対岸に位置する関係で交流も古くから盛んだったことから、下関市と北九州市は関門都市圏と呼ばれる生活圏を形成しています。

また、下関港は、平成23年11月、中国、韓国などの対岸諸国の経済発展を我が国に取り入れること等を目的とした「日本海側拠点港」に選定され、さらに重点的に機能強化を図る「総合的拠点港」にも選定されており、地域経済の発展が期待されています。

管内の名所・話題

〔赤間神宮と先帝祭〕

赤間神宮は源平壇ノ浦の合戦において、二位の尼に抱かれて入水した幼帝安徳天皇を祀った神社です。関門海峡を臨む水天門は白壁に朱塗で造られ、まるで竜宮城のような容姿です。これは、二位の尼が入水の際に安徳天皇を安心させるために詠んだといわれる「今ぞしる　みもすそ川の　おんながれ　波の下にも　都ありとは」の歌に由来するといわれています。

境内には、平家一門の墓があり、小泉八雲の怪談で有名な耳なし芳一の芳一堂には、芳一の木像が安置されています。毎年、5月3日には、上臈参拝で有名な先帝祭のメイン会場となります。

先帝祭は、壇ノ浦の戦いで生き残った平家の女官たちが、苦しい生活の中にあっても安徳天皇の命日には容姿を整え、香花を手向けて参拝していたことに由来します。官女を援けた人物が、後に妓楼を営むようになり、官女達の亡き後その風習を受け継いだことから、現在では、花魁に扮した5人の上臈が稚児らとともに市中を練り歩き、神宮に参入します。最大の見せ場は、水天門から拝殿をつなぐ真っ赤な橋の上を「外八文字」という独特の歩き方で渡る天橋渡りで、鮮やかな衣装に身を包み優雅に歩く姿に思わず見惚れてしまいます。

〔功山寺〕

仏殿は鎌倉時代の禅宗様建築を代表するもので国宝に指定され、柱の墨書により元応2年（1320年）に建立されたことが判明しています。また、堂内には本尊千手観音坐像を安置しています。

幕末の文久3年（1863年）、7卿落ちで京を逃れた7名の公卿のうち5卿が滞在したことや、高杉晋作が当寺で挙兵したことでも知られ、境内には馬上姿の高杉晋作像もあります。春は桜、秋は紅葉が美しく多くの参拝者が訪れています。

〔角島大橋〕

エメラルドグリーンの海の中を真っすぐ伸びていく角島大橋。平成12年に総工費149億円、7年の工期をかけ完成しました。全長は1,780メートルもあり、無料で渡れる橋としては国内屈指の長さを誇ります。角島大橋を渡った先の角島は、映画「四日間の奇跡」のロケ地になり、その景色の美しさが話題となりました。島内の角島灯台とともに眺める夕陽は絶景です。

〔関門海峡花火大会〕

毎年100万人を超える人出で賑わう関門海峡花火大会は今年で30回目を迎えました。海峡を挟む山口県の下関市と福岡県の北九州市門司区の両岸で同時開催されます。合わせて15,000発の花火が、まるで競うかのように打ち上げられる様子は迫力満点です。水中花火や音楽花火、一尺五寸玉の打ち上げ花火が450メートル上空まで上昇し、直径450メートルの大輪を咲かせるなど見所満載で、ライトアップされた関門橋とともに夏の夜空を彩ります。

〔ふぐ〕

高級魚の誉れ高い冬の味覚の王様といわれる河豚（ふぐ）。下関では「福」につながると縁起を担ぎ、「ふぐ」ではなく「ふく」と呼びます。

ふぐのセリは、南風泊（はえどまり）市場で早朝3時過ぎから行われています。セリは伝統の「袋競り」で行われていて、この競りは筒状の黒い袋の中で買い手が指の握り方でセリ人に値段を伝え、最高値をつけた買い手が競り落とすという方法です。

ふぐ刺し、ふぐちり、唐揚げ、ひれ酒…様々な味を楽しめます。高級なイメージのあるふぐですが、地元にはリーズナブルな価格で楽しめるお店もありますので、ぜひ御賞味下さい。

〔川棚・瓦そば〕

その名のとおり、熱した瓦の上に茶そばと牛肉や錦糸卵などの具材、薬味を載せて、温かいめんつゆで食べる料理です。瓦に接した部分がパリパリに焼けて、香ばしさとともにいろいろな食感を楽しめます。

一説によると、西南戦争の際に熊本城を囲む薩摩軍の兵士たちが、野戦の合間に瓦を使って野草や肉などを焼いて食べたという話を参考にして川棚温泉の旅館が始めたと言われています。

一般家庭にも広く浸透していて、家庭向けに蒸した茶そばとつゆのセットがスーパーマーケットなどでも売られています。この時には、もちろん瓦は使わずに（使っても構いませんが…）、ホットプレートなどで調理します。

おわりに

本州の最西端に位置する下関は三方（西・南・東）を海に囲まれ、響灘を流れる対馬海流の影響もあり、年間を通じて気温差の少ない温暖で過ごしやすい地域といえます。本州と九州の結節地点であり、関門海峡で隔てられているものの、連絡船を利用した海路、トンネル（車両・人道）と高速道路の陸路、在来線と新幹線の鉄路によって結ばれた利便性の高い交流都市です。紹介した他にも長府毛利邸や日清講和記念館などの名所が数多くありますし、水揚げ量日本一のあんこうを使った「あんこう鍋」も絶品です！ぜひ、下関へ「おいでませ！！」